



母里地区のイチオシ!

まちの  
タカラ

江戸から続く母里の年末市  
～母里市やまんば祭～



▲もりっこ太鼓を披露する母里小学校の子どもたち。山姥だけでなく伯太太鼓も母里市の伝統となりつつあります。  
◀ 飴を配る山姥。山姥の登場で会場の盛り上がりはさらに上昇していました。

「日本一小さい城下町」といわれる母里藩一萬石の歴史ある町並みの面影を残す母里地区。この地域では毎年「母里市やまんば祭」が開催されています。

この行事の起源は1831年の江戸時代。当時、母里藩が町や町民を活気づけるため、正月用品の販売を中心とする年末市「母里市」を開始しましたが、当初は客足が少なく、賑わいに欠けた催しに。そこで、藩の役人が同藩武士の祖母にお金を渡し、それを来場客に配るよう命じました。この策が功を奏し、その女性は「山姥」として噂されるように。遠方からの客足も増加し、母里市は盛り上がりを見せていきました。

そんな母里市も時代と共に、かつての活気を失っていったことから、平成17年に実行委員会が設立されます。賑わい復興のため、山姥が復活し、名称も「母里市やまんば祭」と変わりました。今では、山姥は「お金」ではなく「飴」を来場客に配り歩くように。山姥や、正月用品、地元野菜、料理などを目当てに客が集い、再度賑わいを見せています。

母里交流センターの梅瀬館長は「この行事は天候や曜日に関わらず毎年12月25日に行っており、楽しみにしている人も大勢います。190年を超えて続くこの行事がなくなることは1つの灯が消えることになるので、今後も続けていきたいです」と今後の意気込みを語りました。

編集後記

▼9月は安来市美術展。10月は総合文化祭。多彩な美術・文化作品にふれ、取材とはいえず豊かな時間を過ごすことができました。自分でも描けたら、作れたらいいなとあこがれますが、なかなか。何かを始めるのに遅すぎる事はないと言いますね。創作の前にとりあえず美術館巡りから始めます(た)

▼古代たたら復元操業を広報担当2人で3日間にわたり撮影しました。最終日は製鉄の炎や参加者の熱気で特にアツい1日に。熟練の職人が鉄の状態を見極める鋭いまなざし、一般参加者が貴重な体験に目を輝かせる様子など、操業の様子が伝わる・ハガネのまち安来をアピールする広報になっていれば幸いです(右)

安来市の人口と世帯数 R6.10.31現在

人口合計	35,228人
(男:16,994人 女:18,234人)	
世帯数	14,274世帯

